

令和6度(2024年度) 学校評価総括表【伊丹市立笹原中学校】

教育目標		予測不能な未来を自立して主体的に生き抜く知・徳・体バランスのとれた「人間力」のある生徒の育成						
重点目標		(1)受容と共感にもとづいた生徒理解を基盤に、規律ある学校生活のもと、主体性、創造性、豊かな人間性、確かな学力を育む (2)全教育課程を通して、高い道徳性と人権意識を育み、保護者と地域との連携のもとで、共に支え合う仲間づくりを行う						
主要 施策	施策目標 基本施策	重点項目	具体的施策	達成目標	自己評価	成果と課題	改善策	学校関係者の評価
学校教育	知・徳・体の調和のとれた児童・生徒の育成	「確かな学力」の育成 ①授業改善 ②誰一人取り残さない取組 ③学校・家庭・地域の連携	・生徒の興味・関心を高め、意欲的に学習に取り組めるようにする。 ・教材や指導法などを工夫し、わかりやすい授業づくりに努める。 ・チーム学習・話し合い活動や発表を積極的に授業の中で取り入れ、学びの共同体づくりに努める。 ・効果的なサクセスシートを全学年実施する。 ・ICT機器(スクールタクトなど)を効果的に活用し、意見を共有しあえる環境づくりを図る。 ・笹トレを活用し、教え合いの基盤を定着させる。また、各教科の授業で効果的に笹トレのノウハウを取り入れる。 ・「笹トレ」や定期テスト前の終礼学習、2学期以降の3年生終礼学習の実施により授業時数を確保するとともに、地域と連携した土曜学習の実施により学力を保障する。	・アンケート結果において「A」「B」評価の割合が90%以上になる。	B	・生徒アンケート「授業はわかりやすい」の項目では87.5%が肯定的な評価(昨年度比+0.6%)であり、そのうちA評価は34.8%(昨年度比-4.0%)であった。昨年度と比べ低下しており、大きな課題である。授業は丁寧であるがマンネリ化しているため、生徒はよりレベルの高い授業を求めていると考えられる。 ・生徒アンケート「授業で話し合いや発表する場面で、積極的に発言できる」の項目は肯定的な評価が69.1%で、昨年度と変わらなかった。昨年度と引き続き、改善を要する値なので、「講義形式」ばかりになってしまっていないか常に見直しが必要である。	・授業のふり返りとして、サクセスシート(ふりかえりシート)は今後も活用していくが、授業内容が確認しやすいような形式を工夫する必要がある。 ・単元テストや小テストを活用し、「わかった」「できた」の達成度を点数で可視化させる。また、内容もスモールステップになるように組み立て、生徒に達成感をもたせるようにする。 ・「笹トレ」については、今後も問題の改良、取り組み等に工夫を重ね今後も継続する。学年を越えて教え合い、学び合うことで学びを確実なものにするとともに、問題が解ける楽しさを味わいながら自尊感情を育てていく。	・「授業はわかりやすい」のA評価が昨年度より低くなったことへの改善が必要である。高いレベルの授業を求めているのか、など原因を探してほしい。 ・「授業での積極的発言」に関する項目は、生徒の意見を引き出す工夫、話題設定・課題設定を身近なものにするなどが必要と考えます。 ・「個別最適な学び」は求められる中で、B評価をA評価にするのは、なかなか難しいとは思いますが、よろしく願います。 ・小学校の時点での学力差が見られるので、中学校では「習熟度別授業」など、それぞれのレベルに合わせた「わかる」が提供できるようにしていかなければいけないかもしれない。
	新しい時代に対応した教育の推進	①情報活用能力の育成 ②情報リテラシーの育成 ③デジタル化の促進	・ICT機器を活用し、生徒の興味・関心を高め、効果的に学習に取り組めるように教材を工夫し、わかりやすい授業に努める。 ・学習のみならず、日常でも生かすことができるように、情報リテラシーの育成に努める。 ・ICTの活用を推進し、その状況が保護者に伝わるよう、授業参観やHP等でアピールしていく。 ・振り返り等にICT機器を活用することで、学習記録を基に、個別最適化された学習やアドバイスに活かす。 ・各授業の授業規律を保つ中で、情報リテラシーの指導についても徹底させる。	・アンケート結果において「A」「B」評価の割合が90%以上になる。 ・教職員のアンケート結果においては「A」「B」評価の割合が100%になる。	A	・「電子黒板やプロジェクターなどのデジタル機器を授業に取り入れている」のアンケート結果では、生徒・保護者において90%以上、教職員においては、100%の肯定的評価を得ることができた。 ・アンケートの結果から生徒や保護者がICT機器を用いて授業が行われていると実感できるようになっている。 ・今後も生徒、保護者が学習でICT機器を活用していると実感できるようなICT機器の活用方法を各教科で研修していく必要がある。 ・スマートフォンやタブレット端末の使用に長けている生徒は非常に多いが、校内外においてインターネットラブルに巻き込まれるなど情報モラルや使用方法で未熟な面も見られる。情報リテラシーの育成も必要である。	・新年度開始の時期に、シラバスの検討と共に、各教科でICT機器の効果的な活用方法について検討する。 ・情報機器の適切な使用法や情報リテラシーについて、日頃の授業のみならず総合的な学習の時間や講演会などを通して指導をしていく。	・笹中の強みであるICTの活用は、先生方の頑張りで、生徒・保護者からも高い評価なので、今後も効果的に活用してほしい。 ・ネットラブルが非常に多い時代となっているので、情報リテラシーや情報モラルについては、もっと早い段階からの指導が必要であると思う。また、家庭・保護者をもっと巻き込んだ教育が必要である。今後具体的な方策を検討してほしい。 ・最近では、タブレット使用の勉強方法は学力が定着しにくいとの意見もあり、そのエビデンスを明確にしていくと同時に、笹中でのあり方を見つめ直すことも必要かもしれない。 ・特別な支援が必要な生徒、特に「書く」「読む」などが苦手な生徒に対して、タブレットでの学習や、テスト時における活用も今後検討してほしい。

主要 施策	施策目標 基本施策	重点項目	具体的施策	達成目標	自己評価	成果と課題	改善策	学校関係者の評価	
学校教育	知・徳・体の調和のとれた児童・生徒の育成	家庭学習の充実	①家庭学習の習慣化の推進 ②デジタル教材の活用	・各教科より進度や理解度に対応した課題を出すことで、家庭学習の習慣化および充実を図る。 ・授業内容の確認や学力向上の成果が見られる課題を作成する。	・単元テストの充実を図るとともに、生徒自ら課題を発見して、家庭で取り組めるようドリルパークの活用をすすめる。 ・生徒が意欲的に取り組み、率先して提出しようと思える課題にするために、提出後の点検をスムーズに行い、次の学習への意欲が高められるような、励みになるコメントや間違いの訂正、疑問点への回答など個別の指導に努める。 ・家庭内で学習する環境に課題がある場合は、放課後学習や土曜学習などを通して、学校で学習時間を確保し、自主学習の習慣化を図る。	・アンケート結果において、「A」「B」評価の割合が80%以上になる。	・「各教科や学年ごとに出される課題(提出物)は、家で取り組んでいる」の項目について、肯定的な評価が生徒81.6%で、0.9ポイント低下、保護者69.8%で、10.3ポイント低下している。 ・サクセスシートを家庭学習で生かせる教科とそうでない教科があった。 ・宿題を家庭ではなく学校で取り組んでいる生徒が多いという実態から、家庭学習の習慣化については個人差が大きいことがうかがえる。 ・いくつかの教科で、「ドリルパーク」を用いて、生徒自ら課題を見つけて取り組む家庭学習のシステムを実施し始めており、今後の学習意欲の向上につながる可能性がある。	・サクセスシートについては、研究テーマとリンクして、効率のよい活用を考えていく必要がある。 ・家庭学習の習慣が身についていない生徒を中心に、タブレット等を活用しながら保護者とも連携し、生徒の自主学習力の向上を図る。 ・各教科で課題を出す際に提出締切を明らかにするとともに、学級の連絡ボードを活用し、取り組むべき課題の見える化を図る。生徒が課題を提出日締切当日に学校で慌てて取り組んでいる様子があれば声かけをし、事前に取り組むよう促す。 ・単元テストの位置づけを明確にする。 ・生徒が主体的に家庭学習に取り組めるようなシステムの構築を図る。 ・家庭学習に繋がる取り組みを各学年・各教科の実態に合わせて協議する。	・家庭学習の充実に関しては、保護者・教員ともに肯定的評価が低い。今後部活動の地域移行が進む中、放課後・帰宅後の生徒の過ごし方が問われる。デジタルの活用と、新しい習慣化の取組が必要かもしれない。 ・家庭学習習慣がついていない生徒には、計画的に学習できるようスケジュールを自分で作成させるのはどうか。得意な生徒のものを参考にさせた上で、生徒自らが課題を見つけることは大切だが、家庭学習＝宿題となっている生徒がほとんどかもしれない。家庭学習の成果が見られるような取組があればいいかもしれない。 ・発想の転換で、思い切って「宿題」をなくす方法もありなのでは。 ・小学校でも期限を決めて課題を出すことはあるが、担任が調整している。中学校では、各教科から課題が出るので、それに対応できる力を、小学校段階からつける必要であると感じた。
	「豊かな心」の育成	①道徳教育の推進 ②いじめ等の未然防止、早期発見、早期対応に向けての組織的な取組の推進 ③不登校の児童生徒やその保護者への支援体制の充実 ④体験活動等の実施 ⑤スクールカウンセラー・スクールソーシャルワーカーの活用	・生徒指導提要や本校生徒指導共通理解事項、いじめ対応マニュアル、笹ナビ(ルール表)に基づき、教職員が連携して組織的な対応を行う。 ・いじめ防止などのための基本方針に基づき、保護者や関係機関との連携のもと、適正な対応を行う。 ・生徒自ら正しい判断をし、よりよい学校を創り上げていくための、自治の力を育てる。 ・生徒の自尊心を育む。 ・不登校生徒に対して、原因や背景について十分な理解を図るとともに適正な対応を行う。	・学校の教育方針や指導方針、いじめ基本方針などを教職員が熟知し、深く理解した上で、あらゆる機会を活用して、保護者をはじめ関係者にわかりやすく説明できるように、組織の一員としての自覚をもって職務に当たる。 ・学校生活におけるルールを教職員、生徒とともに定期的に確認を行う。 ・学校のルールを、生徒会、PTA、地域と連携して見直したり、新たに作ったりするなどの活動を継続する。 ・日々の生活の中で、生徒が自主的に考える力を育むための機会を与える。 ・生徒の自尊心を育むための取り組みを行う。(学年フロアに成果物の掲示するなど) ・生徒指導委員会や不登校対策委員会でも不登校生徒に対して個別の理解を深める。	・アンケート結果において、「A」「B」評価の割合が90%以上になる。保護者と生徒両方のアンケートにおいてこれを達成したい。 ・不登校生徒数が令和5年度より減少することを目指す。 ・学期毎の問題行動が令和5年度より減少することを目指す。	・生徒アンケート「先生はいじめや友達とのトラブルにしっかりと対応してくれる」の項目は90.9%と昨年度と比較すると0.1%減少でほぼ変わっていない。保護者アンケート「学校は、いじめや子ども同士のトラブルなどにしっかりと対応している」の項目は84.9%となっており、昨年度より1.1ポイント増加している。問題行動の未然防止にさらに尽力し、ゆとりある教育活動を推進していく必要性がある。また、組織として迅速かつ丁寧に対応できるように研修会等で意識の統一を図る必要性がある。 ・職員アンケート「問題行動等に対して組織的に対応できる体制が整っている」の項目は92%で昨年度より2ポイント増加している。今後も継続的に組織として体制の整備、共通理解を図っていく。 ・不登校生徒数については、昨年度同時期と同数になっている。 ・問題行動数については、昨年度と比較すると24件減少している。	・保護者対応のあり方について考え直す時期がきているのかもしれない。学校に対応を求められた時、全てに応えることが子どもの成長にプラスなのかを考え、家庭内の問題・しつけとして家庭に委ねることなども必要ではないか。生徒の自立・自律と、保護者対応は分けて考え、生徒同士が問題解決できる力を育成する時間が必要では。 ・学年をこえて、学校全体として連携を密にし、迅速に対応することを今後も期待しています。また、生徒が主体的に考え動く場面を一層増やして下さい。 ・アンケートだけでは見えない部分もあり、生徒・保護者全員が満足いく解決は難しい。受け止め方もそれぞれ違う。そんな中先生方は、ていねいに対応していると感じる。今後も、まずはしっかりと話を聞く姿勢をお願いする。 ・具体的な問題行動を教えていただけとありがたい。学校運営協議会と生徒会・PTAとの情報交換の場が必要。 ・昼休みに図書室でゆっくりとしている生徒もいる様子。教室以外に過ごせる場があってもいいかもしれません。 ・小学校でも様々な理由で学校に来にくい生徒がいる。小中での連携をしっかりと、スムーズな中学校生活につなげていきたい。		

主要 施策	施策目標 基本施策	重点項目	具体的施策	達成目標	自己評価	成果と課題	改善策	学校関係者の評価
学校 教育	知・徳・体の調和のとれた児童・生徒の育成	読書活動の充実 ①朝読書の活性化 ②図書室利用の促進	・図書館司書、スクールサポートスタッフ、図書ボランティアと連携し、開館や図書館便り、選書、図書館まつり等のイベントなど、生徒の図書館利用がより活性化の手立てを取る。 ・委員会活動を活性化し、生徒自身の力による図書館活動を推進する。 ・授業で図書館を活用する。	・アンケート結果において「A」「B」評価の割合80%以上になる。 ・1ヶ月の平均読書冊数1人当たり3冊、平均貸出冊数1人当たり2冊を目標とする。 ・教員による平均読書冊数の周知をはかる。	B	・生徒アンケート「学校は朝の読書や図書館利用など読書に力を入れている」でのA・B評価が91.0%と、昨年よりも7ポイント減少している。生徒が学校に対して読書に力を入れているという印象を持つには、毎年同じ取り組みを繰り返すのではなく、新しい取り組みを行い、図書館まつりの内容にも創意工夫を加える必要があると考えられる。 ・保護者アンケート「学校は朝読書や図書館の整備、図書館だよりの発行など、読書に親しむ機会を設けている」の項目は91%、教員アンケート「朝読書の徹底や図書館利用促進など、読書活動の推進に努めている」の項目は92%と昨年よりもわずかに増加した。 A評価よりもB評価の割合が高く、A評価の割合を上げるためには、その時期に応じた取り組みや、図書室や図書委員だけでなく、教師や保護者を巻き込んだ取り組みが必要であると考えられる。	・図書委員会を中心に図書室の利用状況などについて、全生徒への発信を工夫して行う。 ・図書館利用の推進を図るため、新刊情報や利用状況の発信方法を工夫する。 ・より多くの生徒が図書館に親しめるようなイベントや取り組みを計画し実施する。 ・現在、「図書館だより」はスクールタクトとGoogleにて配信されているが、保護者の目にとまっていなと思われる。そのため、試験的に強化月間や学期末の図書館だよりを紙ベースでも発行する。 ・教員が平均読書冊数の周知を行い、生徒の読書状況の実態を掴む。	・読書活動の充実には、難しい点や課題も多いと思うが、継続して取り組んでほしい。図書委員会を中心に貸し出しランキングを調べる。市内他中学校の貸出ランキングと比較する。先生方のおすすめ本・人生を変えた本の紹介をするなど、生徒の興味を引く企画を考えてほしい。 ・朝読書の取組内容を少し見直しでもいいのでは。紙芝居や読み聞かせの導入や、デジタル図書の活用を進めてみてほしいのでは。 ・読書は、冊数で計るのか、ページ数で計るのかがわからない。
		「健やかな体」の育成 ①児童生徒の体力向上の促進 ②魅力ある部活動の推進 ③発達段階に応じた健全な食育の推進	・「自分の健康は自分で守る」という意識を高め、実行力を育むことを目指し、保体委員会をさらに活性化し、全校生徒に健康に関する情報を発信する機会を増やす。 ・病気や怪我の予防、食育など、健康増進に関する情報を掲示板や保健だよりなどで、引き続き広報する。 ・生徒への個別指導や保護者連絡をとりながら健康管理をすすめるなどの連携をとり、健康増進を目指した取り組みを推進する。 ・給食について、衛生面の指導、アレルギー対応を行う。 ・体力の向上につながる取り組みをする。	・アンケート結果において、「A」「B」評価の割合が90%以上になる。 ・保健だよりを定期的に発行する。 ・給食掲示を季節ごとに更新し、毎日の献立を掲示する。	A	・関係するアンケートの項目では、生徒、保護者、教員全て90%を超えた。 ・保護者のアンケート結果において、「家庭では子どもの生活や学習の様子などをよく把握している」という項目でA評価が6.6ポイント低下した。 ・教員のアンケート結果において、「生徒の健康管理について家庭と連携、情報共有を図っているか」という項目でA評価が3ポイント上昇した。 ・保健や家庭科の授業を通して、病気の予防や健康な体づくりなどの健康増進について生徒に啓発した。また、掲示板や月1回発行の保健だよりを通して、定期的に健康に関する情報を発信した。 ・安心安全な給食実施に向けて、個人のアレルギー対応プランを作成し、家庭と連携しながら、毎月のアレルギー対応を確認した。衛生面での指導の徹底や備品の充実について、今後も継続して進める。 ・残食はほぼゼロで給食を食べており、毎日の献立を掲示することで給食に対する意識が高まった。 ・昼休みに換気を促す放送を行い、全校一斉に換気を行うことができています。	・授業を通して、健康に関する知識を習得するとともに、特に、スマホを使う時間や朝食を食べることなど、生活習慣について、学校と家庭が連携して健康管理について取り組みを行う。 ・自身の健康意識を高め、生徒の主体的な実行力を育てるため、委員会活動を活性化させる。 ・引き続き、掲示板、保健だよりなどを活用して、病気やけがの予防をはじめとする健康に関する情報を発信する。 ・保健室の掲示物が生徒の目に触れる機会が増えるよう、掲示場所を増やす。 ・触ったり体験できたりできる掲示物を作成し、生徒の健康意識を高める。 ・保健だよりが生徒の目に触れる機会が増えるよう、教室に掲示する場所を作り、毎月の張り替えを保体委員会の取り組みに入れる。 ・保健だよりが発行されたときには、保体委員が内容の紹介を行い、全体へ見ってもらうように促す。 ・学校給食を活用した食育に積極的に取り組む。 ・授業や部活動を通して、運動に取り組む、体力の向上につなげる。	・生活習慣は家庭の意識が大切。小学校低学年でも夜11時まで起きている子どももいる。家庭にどう啓発していくかが今後の課題と言える。 ・引き続き達成目標が達成できるよう取組の継続をお願いします。 ・急激に痩せるなど、気になる生徒を先生方みんなで見逃さないよう、気になることへの気配りを続けて下さい。 ・最近では、耐寒訓練のようなものはなくなったのでしょうか。 ・残食ゼロはいいことですが、無理強いがないように願います。

主要 施策	施策目標 基本施策	重点項目	具体的施策	達成目標	自己評価	成果と課題	改善策	学校関係者の評価
学校 教育	教育相談・支援体制の充 実 ①キャリア教育の推進 ②進路指導の充実 ③教育相談の充実	・生徒の将来を親身に考え、ひとり ひとりに合った進路実現に向けた 指導を行う。 ・正しい情報提供を図り、家庭との 連携に努める。	・進路学習資料を活用し、自分の 特性を見つめ、適切な進路を設計 する力を養う。 ・トライやる・ウィークの取り組みを 活用し、いろいろな職業があること を気づかせ、社会の一員になる意 識付けを行う。 ・教育相談や三者懇談会などの時 間などを生かして、生徒だけではなく 保護者との対話時間も確保する。 ・1年生および2年生は毎学期、定 期的にキャリア(進路)学習を行い 将来への見通しと進路に向けての 意識付けを行い、希望を持たせる 取り組みをする。	・アンケート結果において、「A」「B」 評価の割合80%以上になる。 かつ、生徒と保護者の差を10%未 満にする。	A	・生徒アンケート「学校は将来の進路に ついて正しい情報提供や指導をしてく れている」の項目は92.7%(前年度 92.2%)だったが、保護者アンケート「学 校は将来の進路について正しい情報提 供や指導を行っている」の項目では 82.3%(前年度79.7%)と、生徒との意 識の開きがあり、前年度と比較し若干 差が改善された。 ・今年度は3年生の生徒に対して6月か ら7月にかけて、私立高校の出前説明 会を実施した。男子校や女子校、工業 や商業などの専門学科の説明もあり、 具体的に進路のイメージができたと思 われる。 ・今年度、保護者アンケートの評価が低 くなっているのは、保護者向け私立高 校出前説明会が、実施できなかったこ とや、スクールタクトへの配信は多かつ たが、Googleクラスルームでの配信が 少なかったことなどが原因と考えられ る。 ・三者懇談会や教育相談などの機会を 生かして、個に応じた進路についての 対話時間を確保していくことができた。 ・私立高校の情報を発信するため、3年 生では、学校に来校してもらい学校説 明会を実施した。2年生では、進路学習 の一環で、出前授業として来校してもら い、授業を受けた。結果、80%以上が、 「進路に対する意識を持ちきっかけと なった。」と感じている。さまざまな進路先が あることを知るきっかけになった。	・感染症対策をしっかり行っていきなが ら従来通りの進路説明会を確保してい くとともに、スクールタクトやGoogleクラ スルームでの配信などを活用して、積 極的に情報発信し、伝える工夫と努力 を続けていく。 ・私立高校の出前説明会を生徒だけで はなく、保護者対象でも実施できるよう に私立高校との協議していく。 ・進路情報は毎年変化していつている。 本年度もWeb出願の高校が増え、手書 き願書での出願は少数派となった。操 作方法や受験料振込のタイミングなど 保護者との意思疎通をしっかりと図り、 連絡を密にする必要がある。 ・学校における進路の取り組み内容や 関連する活動を計画的に推進すると ともに、保護者にも進路通信などを活用 し、引き続き、積極的に情報を発信する 意識を持って伝えていく。 ・1年生に対しても仕事体験をするな ど、将来のことを考える場を設定する。	・進路情報も毎年変化しているようであ るので、生徒だけでなく、保護者にも丁寧 な情報提供を今後もお願いします。 ・生徒や保護者も進学希望先の学校説 明会等には参加すると思いますが、出 前授業や高校生との交流はイメージが わきやすくなるので、今後も継続してほ しい。 ・トライやる・ウィークでの体験は、校内 で次の学年に共有してほしい。 ・トライやる・ウィークは、一度見直して もいい時期ではないか。同じような職種 の事業所しか受け入れなくなっており、 本来の意義が薄れているいか。 ・教育相談後、必要に応じて保護者へ の外部関係機関へのつなぎをすることが 必要な時代かと感じる。
	特別支援教育の推進 特別支援教育の充実	・特別支援学級生及び必要に応じ て通常学級の生徒に対しても個別 の指導計画を作成し、適切なサ ポート体制を強化する。 ・特別支援教育に関わる教職員だ けでなく教職員全体で、日常的に 連携をはかりながら、特別支援教 育推進委員会や学年会議などで生 徒の情報を共有し、適切な支援に つなげる。	・個別の指導計画の作成が生徒支 援の充実につながるよう、適切な 時期に適切な方法で作成し、学年 の共通理解につなげる。そのため に、特別支援教育推進委員会から 全教職員に周知し、サポートファ イルの内容を検討する。 ・配慮が必要な生徒、個別の支援 が必要な生徒を年度当初に確認 し、特別支援教育推進委員会で共 通理解する。生徒情報入力ファ イルを作成し、毎週木曜日に行う特 別支援教育推進委員会で情報共 有を行い、学年にフィードバック する。	・アンケート結果において、「A」「B」 評価の割合が80%以上を継続す る。		・アンケートでは、教職員の肯定的意見 が88%(前年度80%)と前年度より上 がっている。特別支援教育への意識 が高くなり定着してきた。 ・特別支援教育推進委員会が個別の支 援に必要な生徒の共通理解を図ったこ とで、学年間での情報共有がスムーズ に行われるようになった。特に委員会 メンバーの経験から進路の情報が共有さ れ、具体的な支援の方向性を学年に伝 えることができた。 ・支援が必要な生徒に対して、学年・学 校全体でしっかりと支えようとする意識 があり、快く協力し合うことができて いる。 ・通級指導が定着し、個に応じた指導 が充実した。今年度は、2年生で2名通 2コマの授業ができた。また教師1人 で2人の生徒を授業する「2対1」の授業 も一コマ実践できた。 ・個別の指導計画作成や生徒ひとりひ とりに沿った支援の具体についてはま だ課題が残る。 ・生徒・保護者の質問事項が特別支援 に当てはまりにくい。 ・支援委員会から学年へのフィードバ ックが不十分なことがあった。	・特別支援学級担任、生徒支援担当、 通級担当、特別支援教育支援員、保健 室、関係機関など、様々な立場の教職 員が情報を共有し連携することで、一 人一人の生徒をよく見て様々な機会を 捉えて支援を行うことができるよう になってきている。これからも対話を重 ねながら、生徒が必要な支援を受けられ る手立てを講じる努力が必要である。 ・UDのさらなる導入や支援の具体につ いて、今後も研修の機会を設け、より効 果的な支援が行われるよう努める。 ・来年度からは、アンケート分析の際 に、生徒の質問1・4・7や保護者の質 問2の結果も入れた分析としていく。	・今後特別支援教育へのニーズは高ま ると思う。そんな中、先生方の特別支援 教育への意識が高くなっていることは 良いことだと思う。教員人数の少ない中 で、個人個人への対応は大変だと思 うが、今後も情報共有や協力のもと、使 途とじっくりと向き合い成長につなげて ほしいです。 ・交流学級での学校生活も、通級指導 での指導も、その生徒が「わかった」と いう実感がもてることが大切。どちらも 重要。 ・幼稚園や保育所から小学校へサポ ートファイルが引き継がれないケースが、 まれにある。今一度校種間での連携を しっかりとる必要性を感じる。 ・特別支援教育への保護者の意識も高 くなっているため、個々の教員がしっ かりとした知識を持つ必要がある。

主要 施策	施策目標 基本施策	重点項目	具体的施策	達成目標	自己評価	成果と課題	改善策	学校関係者の評価
学校 教育	教職員の資質向上 ①研修等の充実	・生徒や保護者の評価や学力調査の結果を検証し、授業等の改善や工夫につなげる。 ・学力向上のための手立てを共有し、効果を検証する。	・単元の中にプロジェクト型学習を取り入れた、授業づくりを行い、最終的に探究的な力を生徒につけさせたい。 ・授業スタンダード「笹スタ5」を基に普段の授業の充実を図る。	・アンケート結果において「A」「B」評価の割合が90%以上になる。	B	・生徒アンケート「授業はわかりやすく楽しい」の項目でAB評価が87.5%であり、昨年度より0.6%上がっている。令和3年度は93.0%であったので、まずはこのまま上昇していきたい。 ・保護者へのアンケートの中で「先生は生徒の学力向上のため、授業の工夫や補習の実施などに努めている」の項目は過去3年間で年々低下している。 (89.2% → 84.9% → 83.5%) ・研修を重ねる中で、年1回の公開授業をきっかけに「習得」「活用」「探究」を考えながら授業づくりが「できつつある」。	・保護者へのアンケートの中で「先生は生徒の学力向上のため、授業の工夫や補習の実施などに努めている」の項目でAB評価が83.5%であり、昨年よりも1.4ポイント減少している。保護者をはじめとして、授業を見もらう機会を増やしたり、授業評価アンケートからしっかり分析して、授業を受ける側の理解をもっと深めていかなければならないので、授業改善に最善を尽くすためにも、教科部会の機会を増やしていく。	・授業がわかりやすく楽しければ、生徒の成績は上がっていくと思う。そのために先生方の授業等のより一層の工夫をお願いします。 ・保護者からの厳しい意見もあるかもしれないが、先生方はよく働いておられ、生徒としての良き味方だと感じる。 ・保護者は自分の子どもを通してしか先生方の授業の工夫等は見えないので、それらを保護者知ってもらう場面が必要だと思う。
教育 環境 の 整備 ・ 充実	学校を支える組織体制の整備 ①コミュニティ・スクールの充実 ②地域と学校の連携・協働体制の構築	・コミュニティスクールとしての取組を充実させるため、学校運営協議会ならびにPTA本部との定例会を開催し、保護者や地域と相互理解を深める。 ・学校行事やオープンスクール等の実施により、学校教育活動について保護者や地域との連携を図る。	・学校運営協議会やPTAを中心に学校支援ボランティアへの参加を促し、活動の活性化を図る。 ・生徒会を中心として、地域ボランティア活動の活性化を図る。 ・学校だよりや学年だよりなどの配付物のデジタル配信、正門横や校内の掲示板への掲示、地域の会議等への参加、ホームページの随時更新等により、学校教育目標や教育方針、行事、授業等の様子を発信し保護者や地域の人々に広くPRする。 ・学校行事やオープンスクールなどを保護者や地域に広く案内し公開するなど、学校への来校や学校教育活動への参加の機会を設定する。	・年4回の学校運営協議会ならびに月1回のPTA本部との定例会を開催し、情報交換を行う。 ・生徒アンケートの項目「地域活動に参加したい」の「A」「B」評価の割合が、75%以上になる。 ・学校だより、学年だより、その他配付物についてデジタル配信を行うとともにホームページを週5回以上更新する。 ・学期に1回オープンスクールなどを実施し、保護者等が来校する機会を確保する。	B	・年4回の学校運営協議会および月1回のPTAとの定例会を開催し、学校教育活動の様子について情報提供するとともに、各行事の開催方法や校則等について協議した。 ・保護者や地域住民による学校支援ボランティア(図書、園芸、土曜学習)の活動が定着し、内容も充実している。 ・生徒アンケート「地域の行事に参加したい」の項目では、肯定的な評価が昨年度の73.5%から70.7%となり、目標の75%に届かなかった。 ・「ささはら祭り」「笹小地区もちつき」の準備・後片付けの協力や祭りへの参加を生徒に広く周知した。また、地域のこども園や小学校と連携し、「笹フェス」の会場として地域と連携してイベントを開催した。 ・学校だより、学年だより、学級だより、その他の配付物について、GoogleFormsおよびスクールタクト等を活用しデジタル配信を行うとともに、学校HPは週5回以上更新した。 ・生徒アンケート「学校だよりや学年だよりなどで学校のことがよくわかる」の項目では91.1%、保護者アンケート「学校は、学校の教育方針や行事、活動などを学校だよりや学年だより、ホームページなどを通じて保護者に伝えている」の項目では96.2%が肯定的な評価となった。	・学校運営協議会委員やOSコーディネーターと連携し、ホームページやコミュニティスクールだより等を活用して、地域や保護者へ学校教育活動の様子を積極的に発信する。 ・生徒会を中心に参加型地域学習などを企画する(笹フェスの継続等)。 ・地域へのボランティア活動を引き続き推進する。 ・個人情報に留意しつつ、各種行事や講演会、部活動など学校の様子が具体的にわかるよう随時ホームページを更新し啓発に努める。 ・オープンスクールの実施方法を現在の午後だけのままか1日中にするかなど実施方法をPTAと相談し、保護者が来校しやすいように改善していく。	・地域の方や保護者が参加できる企画を考えていくのも1つでは。 ・現在学校支援ボランティアで取り組んでいる「図書」「園芸」以外に、地域で活動されている「趣味」「運動」「料理」などの講師を広く募って、部活動の地域移行と併行で、生徒参加のクラブ活動のような企画はできないでしょうか。 ・地域行事などに笹中生が協力しているのはすばらしいと思う。 ・中学校の校区は広くなるので、地域との連携も難しくなる面もありますので、工夫が必要を感じます。

主要 施策	施策目標 基本施策	重点項目	具体的施策	達成目標	自己評価	成果と課題	改善策	学校関係者の評価
教育 環 境 の 整 備 ・ 充 実	安全・安心な教育環境の 充実 ①学校園防犯訓練・防災教育の充実 ②子どもの安全対策の推進 ③交通安全対策の推進 ④学校園施設の整備・維持保全 ⑤学校における働き方改革の推進	<ul style="list-style-type: none"> ・自転車交通安全教室や防災訓練を通して安全に生活する事や自分の命を自分で守ろうとする意識を高める取り組みを行う。 ・災害や犯罪から身を守るすべについて、具体的に学習する場を設ける。 ・清掃活動を活性化し、教育環境を整える。 ・安全点検を徹底し、安全・安心な学校づくりを進める。 	<ul style="list-style-type: none"> ・自転車交通安全教室を発達段階に応じて内容を吟味して実施する。 ・年2回の防災訓練に向けた事前学習の徹底を図り、防災意識の向上を図る。 ・防災や安全に関する情報を随時活用し、実生活とのつながりを意識させるような学習を企画する。 ・防災に関する教師向けの研修会を実施し、学校防災体制の見直しや推進を進める。 ・社会科や家庭科の授業を通じて、防災に関わる知識を身につける。 ・美化委員を中心として清掃用具の整備を行う。 ・安全点検を実施するための時間を確保する。 ・「もくもく清掃」に取り組む。 ・学校環境をきれいな状態に保つ。 ・委員会の強化月間において、クラスの清掃を見直す期間を設ける。 	<ul style="list-style-type: none"> ・アンケート結果において、「A」「B」評価の割合が80%以上になる。 ・年2回避難訓練を実施する。また、訓練の実効性を高めるため、毎年度、訓練の実施方法を見直す。 ・講話や講習などを年1回以上実施する。 ・月1回、清掃用具の破損や不足を点検する。 	B	<ul style="list-style-type: none"> ・生徒・保護者アンケートともに該当項目において90%近い肯定的な評価を得ているが、令和5年度結果に比べると最も肯定的回答からやや肯定的回答へと下落した。 ・災害を具体的に想定した訓練の実施を含め、年2回の防災訓練を実施できた。また、訓練を前年度から見直し、訓練実施時間を生徒だけでなく教師にも告知しないようにするなど、工夫を加えることができた。 ・1年生を対象に自転車交通安全教室を実施した。 ・2・3年生への自転車交通マナーの注意喚起の講習・講話が実施できなかった。 ・学校美化に関する評価は非常に高く、アンケートでも生徒・保護者ともに、97%以上が肯定的評価であった。 ・行事予定にも安全点検実施と記載しているが、取り組みを促すアナウンスが職朝連絡での書き込みにとどまり、点検実施が徹底できていなかった。 ・月1回の専門委員会後、清掃用具箱の中の掃除用具チェックを着実に行っている。 ・美化委員の落ち葉掃除は、落葉の多い季節の朝の時間帯に行った。美化委員だけでなく、美化委員の友人も清掃活動に加わった。 ・「もくもく清掃(無言清掃)」が新入生にも少しずつ定着しているが、「もくもく清掃」ができていたとは言いがたい。 	<ul style="list-style-type: none"> ・1月の地震想定防災訓練では、毎年度工夫や改善を加え、実施における見直しを進めてきた。今後もより実効性の高い訓練のあり方を模索していきたい。 ・2・3年生を対象に自転車の安全な乗り方やルール、罰則に関する知識を身につけさせる。 ・学校内にある非常時や災害発生時に必要な物品を総点検し、数や所在を一覧でわかるようにまとめた地図状のものを作成する。 ・専門委員会の中で、清掃用具の不足や不備があれば補充したり修繕したりするようにする。 ・月1回の安全点検を徹底するために、職朝連絡での書き込みだけでなく、実施が滞っている教員に直接呼びかけるなど、やり方を工夫する。 ・「もくもく清掃(無言清掃)」時に喋ってしまう生徒がいるため、生徒への注意を美化委員にさせる。また、指導時になぜ「もくもく清掃」を行っているのかを伝える。 ・朝の清掃活動や落ち葉拾いは美化委員だけでなく、ボランティアや部活動など有志の生徒と連携して活性化に努める。 ・現在使っている机と椅子を、古いものは新しいものに入れ替えていく。 ・災害対応訓練だけでなく、不審者に対応した訓練の実施について検討を進める。 	<ul style="list-style-type: none"> ・トイレや校内の改修後、校内環境がきれいになり明るくなったことで、学校美化の評価が高いと思われますが、それを維持する「もくもく清掃」が一部できていないのは残念です。 ・防災訓練は、今後も工夫・改善を加えながら、万が一に備えての訓練をお願いします。先生の指示に従うだけでなく、生徒が主体的に考えられる実施ができればと期待します。地域の方との連携も検討してほしい。 ・自転車安全教室を実施し、罰則も強化される中、マナーが悪い場面も見られるので、安全な乗り方やルール・マナーの指導を再度徹底してほしい。 ・働き方改革とのバランスがとても難しい状況、それが今の学校ですね。

学校関係者評価総括 <ul style="list-style-type: none"> ・全体的にA、B評価なので、先生方がとても努力されていて、その頑張りがうかがえます。また、保護者からの信頼もあるから、A、B評価につながっているのだと感じます。学校運営協議会としても、今後も学校と協働していきたいと思います。 ・学校が生徒や家庭と関わる時間は、1人当たりの時間としては、少しではありますが、貴重な時間であると思います。全体的な視点から見ると改善点とあわせて、各個人への対応という視点で、常に教育活動を見直し、修正をかけてほしいと思います。
次年度に向けた重点的な改善点 <ul style="list-style-type: none"> ・課題についても、改善点が示されているので、取り組みの確実な実践・実行。 ・小学校でコロナ禍を過ごした生徒への、「対人コミュニケーション力」「体力」への対応。 ・一人一人の生徒へのきめ細かな対応とそれに向けた教職員の協働体制・組織体制の充実・強化。 ・情報リテラシーや情報モラルについて、学校と家庭の横連携の充実および活性化。

自己評価の基準 A: 目標を上回った B: 目標どおりに達成できた C: 目標をやや下回った D: 目標を大きく下回った